

《水室》の季節

伊海孝充

三角に切ったういろいろに小豆を散らした「水無月」という菓子がある。一般的に、「古く陰暦六月一日に氷を食べる風習があり、その氷の形に作ったところから」名付けられたと考えられおり『日本国語大辞典』「水無月」の項、その六月朔日に氷を食する風習は、「古く宮中で水室の節会が行なわれた日。この日、水室から出し宮中に献上された氷を臣下に下賜された」ことを起源とすると考えられている(前掲書「水の朔日」の項)。

このように、宮中では水室の節会なる行事が行われ、その時水室から切り出され、天皇が食し、暑さを凌ぐとともに無病祈願をしたという説明をよく目にする。しかし、様々な史料にあたっててもそのような行事が行われた形跡はないようだ(『日本民俗大辞典』)。精査したわけではないが、この説が流布したのは江戸時代であったようで、諸大名が大名に氷を献上した水室(氷)の節句や「水の朔日」という言葉が、俳諧を始めとする近世文芸に広く定着したことに起因していると考えられる。

こうした(水室伝説)の影響だろうか、能《水室》も初夏の曲という印象が定着しており、

六・七月の上演が多い。しかし、近代以前の上演記録を見ると、この曲にそのようなイメージはない。脇能としては上演頻度も高く、季節を問わず演じられ、將軍宣下能などハレの場の演目としても選ばれている。こうした

《水室》の歴史を理解するためには、水室という場所に対して抱く季節ではなく、《水室》という能が描く季節に注視しなければならぬ。この曲は、丹波の水室に立ち寄った亀山院の臣下(ワキ)のもとに水室明神(後シテ)が現れ、君の威徳を称え、氷を捧げる、という内容であり、「水室守り 春も末なる山風や 花の雪をも集むらん 深谷に立てる松陰や」(二段「セイ」とあるように、確かに季節は新緑の頃と設定されている。ただし、「冬の気色を残すらん」と続くように、その季節を特定するわけではなく、冬から夏までの連なりとして描かれている。この一つの季節を超越するような水室の時間の捉え方は、この曲の至るところから看取される。

A 花の名の 白玉椿八千代経て 緑にかへる空なれや 春ののちせのやま 続く 青葉の木陰分け過ぎて…(一)

段「上ヶ歌」

B 夏の日に なるまで消えぬ冬氷 春

立つ風や 避けて吹くらん げに妙なれや 万物時にありながら 君の恵みの色添へて(中略)氷を重ね雪を積みて 待ち居れば春過ぎて はや夏山になりぬれば いとど水室の構へして 立ち去ることもなつかげの水にも澄める水室守 夏衣なれども袖冴ゆる気色なりけり(四段「クセ」)

Aは「君が代は白玉椿八千代ともなにか数へん限りなければ」(後拾遺集)に基づく詞章からはじまるが、この和歌の「白玉椿」は『莊子』逍遙遊「上古有三大椿者」、以三八千歳為「春、八千歳為「秋」の故事に基づいており、不老不死の理想郷に生える植物と考えられていた(『和歌植物表現辞典』東京堂出版、一九九四年)。この椿と同じく、八千年の春秋を経るように、秋から春へと時間が経過する様が水室山までの道程に投影されている。Bは御調物としての氷を称える場面であるが、夏・冬・春という季節を連ねる文句から始まり、その後半では前年に雪や水が積み重なり夏まで残る様や、水室守の夏衣の袖が冷たくなっている様子など、季節の重層性・二重性が語られているのである。

能《邯鄲》の夢中の宮殿や御伽草子「浦島太郎」の竜宮城が「四方四季」として描かれているように、「万物時にありながら」もその「時」を超える世界は、中世人にとって理想・願望

の表れであった。すなわち、季節を超越する氷室はこの世に在る（理想郷）として描かれているといえるが、能《氷室》は、その氷室が「君」の力によって存在する、と説いている点が重要である。

脇能はシテである神々を畏敬の念を表しながらも、それらに守護される御代を賛嘆する点に眼目が置かれている曲が多い。《高砂》は松の徳を描く能であるが、その松は和歌の象徴であり、その和歌の隆盛は御代の繁栄を表すという論理で構成されているし、《難波》は梅の花に例えられる仁徳帝を称えることで、その仁徳帝と同等に尊い当代を寿ぐ内容になっている。

《氷室》も「君」を寿ぐ能であるという点は同じだが、その称え方が他曲と趣を異にしている（詞章は、『謡曲集 下』（伊藤正義校注、新潮社、一九八八年）から引用）。

A ワキ「げにげに翁の申すごとく 山

も所も木深き陰の 日陰もささぬ深  
谷なれば 春夏までも雪氷の 消えぬ  
ぬもまたは理りなり シテ「いや所  
によりて氷の消えぬと承るは 君の  
威光もなきに似たり（三段「掛け合）」

B 夜の間に來たる春にだに 氷は消ゆる

慣らひなり ましてや春過ぎ夏  
開けて はや水無月にまるまでも消え  
る雪のあさごおり 供御の力にあら  
では いかでか残る雪ならん（三段

「上ゲ歌」）

《氷室》三段はワキに問われ、前シテの老人が『日本書紀』や『壺囊鈔』などが記す氷室発見譚を語る場面だが、この段末で日の差さぬ深谷だから氷が溶けないと理解するのは、君の威光がないと考えるのと同じだと説いている（A）。すなわち、水無月になっても氷室の水が溶けないのは、君が口にする君の御調だからだ（B）と解釈されているのである。こうした君の称え方は、「君の世の泰平」を寿ぐ他の脇能とは祝言のベクトルが異なっていると言えないだろうか。つまり、「君」を称えるという趣向は同じだが、《氷室》は「君」自身の超越性・神秘性を称える能だと解釈できる。

《氷室の水は君の御調物だから溶けない」という論理は能作者が「一から築いたのではない。前掲Bの傍線部が『後拾遺和歌集』所収の源頼実の歌に基づいているように、和歌からの影響が顕著である。中世以降、氷室は和歌に詠まれることが多くなったが、「春も過ぎ夏たけぬれど氷室山冬ををさめておけるなりけり」（後成五社百首、「外は夏あたりの水は秋にしてうちは冬なる氷室山かな」（『夫木和歌抄』後京極撰政）と、やはり季節の連なりの中で詠まれる歌が散見できる。また「とどしの勅をかさねて氷るらしとけぬ氷室の千世の松蔭」（『宗良親王千首』、「君がへん御代ながさかのひむろにはうづむほりのとけぬなりけり」（『堀河百首』国信）のように、「君が代」を賛美する歌の中で氷室が詠まれる例も少なくない。ただし、御調物としての氷室の水を強

調する歌、君の威徳によって氷室の水が夏まで溶けないことを詠んだ歌はないようなので、能《氷室》はこうした和歌世界における氷室のイメージに拠りながらも、氷室の不思議を通して「君」の聖化を図った能だといえるだろう。

天野文雄の研究によれば、世阿弥の脇能は足利義満・義持の治世を賛美することを眼目に作られたという『世阿弥のいた場所』ペリかん社、二〇〇七年）。前述の通り「君が世」の泰平を寿ぐ内容なので、その君が天皇ではなく、世を治める將軍であったという解釈は首肯すべきだろう。では、世阿弥の脇能とは異なる方法で「君」を賛嘆する《氷室》には、どのような成立背景が想定できるだろうか。『能本作者注文』は宮増作としているが、この能作者については未だわからないことが多い。また丹波猿楽の能であったという推測もあるが（天野『氷室』と丹波猿楽『鏡仙』三三五号）、いずれにしても世阿弥時代よりは「もう少し後の成立」であった可能性が高い（新潮日本古典集成『謡曲集 下』解題）。そうすると、季節をも超越させる「君」の威光を語る《氷室》は、強権的な政治を行なった六代將軍・義教を賛美する目的として作られたのであろうか。もしくは、それより後の戦乱の世において、超越的な「君」の出現を願う思いが投影されているのだろうか。本稿の考察だけでは、《氷室》の「君」の姿を捉えることはできないが、この曲の個性が成立背景を知る手掛かりとなるだろう。

（法政大学教授）